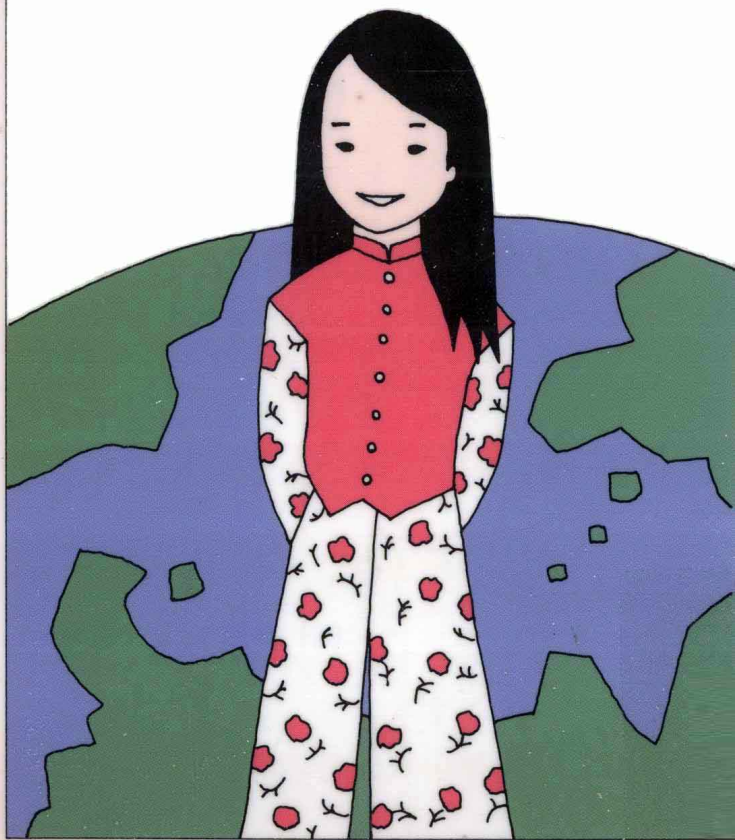


岩波ジュニア新書 129

# みんな地球に生きるひと

出会い・わかれ・再見

アグネス・チャン 著

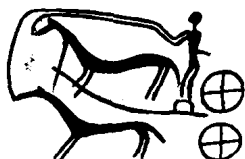


---

# みんな地球に生きるひと

—— 出会い・わかれ・再見 ——

アグネス・チャン著



岩波ジュニア新書 129

---

日本財団支援

# 笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

みんな地球に生きるひと

岩波ジュニア新書 129

---

1987年6月22日 第1刷発行 ©

定価 580 円

著 者 アグネス・チャン

発 行 者 緑 川 亨

〒101 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発 行 所 株式会社 岩 波 書 店

電話 03-265-4111

振替 東京 6-26240

印刷・製本 法令印刷

---

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan  
ISBN4-00-500129-7

はじめに

私は香港生まれで香港育ち、流れている血は中国人、羊年ひつじで獅子座しし。血液型はAB型です。香港ですから国籍はイギリスです。一四歳の時、香港で歌手としてデビュー。一七歳でスカウトされて日本に来ました。二〇歳で一度日本を離れ、カナダの大学に留学。二三歳でカムバックしたのです。一昨年結婚しましたが、私はいまだに中国人でイギリス国籍です。夫は日本人、ひとり息子はカナダで生まれたのでカナダ人です。

私は、自分の人生とか自分の命は、自分だけのものではないと考えています。私をつくってくれたのは、やはり人との出会いです。本では勉強できない、あるいは日頃接することができないような人たちが、一つ一つ教えてくれた結果、今日の私があるという気がするのです。

どんな人でも先生です。勉強がすぐできて知識の高い人ばかりが先生ではありません。

子どもたちや、旅ですれ違った人たちも、私にとってはすべての人が先生なのです。人から学ぶ精神をいつももっていれば、人生が豊かになると、私は思います。

自分を見る時、鏡で見ても、前しか見えませんね。でも、自分の全体像は、見てくれる人たちの目にいろいろな角度で映るのです。それで、欠けている部分がどんどん埋まっていって、平べったい自分が立体的に見えてくるのです。

桂林のおじいさんに会うまで、私は現代人だ、私は豊かだ、金持ちだと、自分の傲慢さに気づかず生きていました。

NASAの取材で出会った人たちから、私は実は何も知らされていないのだというこわさ、知らないところで知らないことが行なわれているこわさを学び、平和の大切さを考えさせられました。

貴州の子どもたちは、私が探し求めていた根っこ、私のルーツを見せてくれました。そして、歌の大切さ、歌の原点を教えてくださいました。彼らの音楽に対する素朴な情熱にふれ、私は自分が、何のために歌っているのか、何のために十何年も歌ってきたのか、考えさせ

られました。

シスター・ロサリーには、人間の生き方のいちばん基本、自分自身の探し方を教わったような気がします。

ローマ法王には、ほんとうの愛を学びました。人を愛すること、死をこわがってはいけないこと、欲をもってはいけないことを学んだのです。

カナダの校長先生は、私たちでもすぐまねできるような方法で、自分の生き方を実行しています。理想的な家族のあり方の親近感あるモデルの一つなのです。

私が出会った人たちは、すべていい人たちばかりだったわけではありません。いじめっ子もいたし、差別する人たちもいました。

長男の和平やへいを抱いていると、ああ、命ってこういうものかなというイメージが浮かんでくるのです。命はつながっているし、まわっているんですね。私が生きている間は、父は死んではいません。和平が生きている間は、私は死なないのです。そうして、命はずっとつながっていく。親になって、初めて、命は無限だという言葉を「ああ、なるほどな」と

実感したのです。

この本では、私というモザイクをつくってくれた人たちについて、書きました。私が彼らから感動して得たもの、そのかけらは、すべて私の一部になって、私のモザイクの中で、重要な一枚一枚になっています。その中でもとくにきれいに光っている、いくつかのモザイクを選んでみました。ぜひみなさんに読んでもらいたいのです。そしてこの本が、みなさんのモザイクのひとつかけらになってくれれば、とてもうれしいのです。

一九八七年五月

アグネス・チャン

## 目次

### はじめに

|   |                 |    |
|---|-----------------|----|
| 1 | 桂林のおじいさん        | 1  |
| 2 | アメリカのこわい人たち     | 21 |
| 3 | カナダの校長先生        | 39 |
| 4 | 中学三年生の女の子       | 53 |
| 5 | ローマ法王、ヨハネ・パウロ二世 | 67 |
| 6 | 中国の子どもたち        | 79 |
| 7 | アラゲとアルメイト       | 97 |

|    |                    |     |
|----|--------------------|-----|
| 8  | シスター・ロサリー          | 121 |
| 9  | 差別するひと、されるひと       | 137 |
| 10 | MY FATHER・MY CHILD | 155 |
|    | 私の生きかた             | 181 |

写真提供

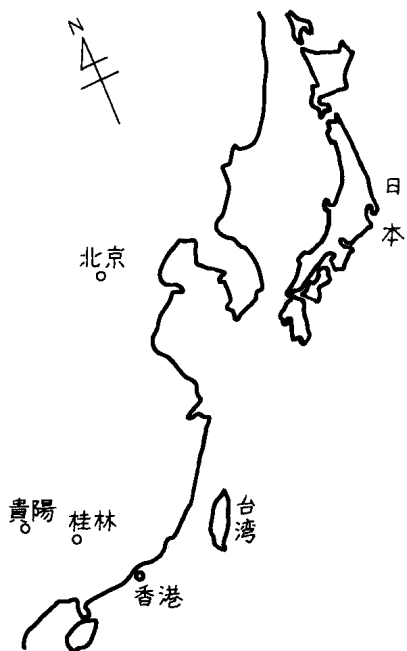
北出博基

渡辺プロダクション

文化放送

共同通信

# Ⅰ 桂林のおじいさん



帰るべきだというしるし

一九八一年の夏、香港生まれで香港育ちの私は、一つの大きな決心をしました。それは、祖国である中国へ初めて帰ることでした。

イタリアとアメリカと中国と日本、四カ国合作のテレビ映画『マルコ・ポーロ』への出演が決って、私は中国娘の役で、中国ロケに参加したのです。

その時まで、私はよく台湾で仕事をしていました。台湾では歌手としてレコードを出すだけでなく、映画にも主演し、毎年幾つかテレビの特別番組に出演していました。私にとって、台湾は大切な活動場所でした。また、台湾には母の親戚がたくさん住んでいます。母の故郷と同じ貴州から出てきた人たちです。だから私にとっては、どうしても中国より台湾のほうが身近でした。

それに「一度でも中国に帰ったら、もう台湾で活動ができない」と聞かされていたので、中国へは帰りたくても帰れなかったのです。

## 1 桂林のおじいさん

でも、この『マルコ・ポーロ』の話がきた時に、もしも出演が決ったら帰るべきだというし、うしろなのかなと、なぜかすごく思っていました。

イタリア人のプロデューサーが来日して、オーディションを受けました。有名な女優の方も、みんなそれぞれオーディションがあって、結局私が選ばれたのです。受かった理由は簡単。私が南の中国の女の子の顔をしている、と言うのです。それはあたりまえ、私はそこから生まれた子ですもの。もう一つは、私の英語力でした。英語でお芝居しなければいけないので、英語の上手な人がいいと決めたようです。

私はまっ先に香港にいる親と相談しました。母は「そんな大作ならいいじゃないですか」と言ってくれました。私は「やっぱり帰るべきだというしるしだな」と納得して、中国へ帰ることに決めたのです。

### 桂林というところ

撮影は、まず北京のスタジオで行なわれました。その次のロケ地が中国でも一番景色の

美しいところと、地元の人たちが自慢する桂林だったのです。

すごくスケールが大きいと思ったのですが、村をまると一つ借りたのです。竜門村という村でした。朝から暗くなるまで借りるのです。毎日幾らって、人間も含めて全部借りるのです。農家を借りて、メイク室とか何かをつくったのですが、トイレはなかったんです。

とにかく貧しい村でした。桂林は「山水甲天下」(世界中でいちばんきれい)と言われ中国の山水画によく出てくる風光明媚ふうこうめいびなところです。でも土がすごく悪いのです。もともと海底だった土地で、作物があまりよくできません。桂林でいちばん有名な産物といっても、唐辛子だけなのです。その唐辛子も、毎日の主食にはならないから、よそに売るしかないのです。農民は、貧しい人たちが多いのです。

竜門村というのは、桂林の中心地から車で三〇分くらい、歩くんだったら速足はやあしでも三時間ぐらいはかかるでしょう。すごくきれいな村で、漓江という川が流れていて、ちょっと斜面になっている、貧しくても、環境はすばらしいところです。



マルコポーロ役のイタリア人の俳優と中国娘の扮装で

## 貧しさに涙ぐむ

北京にいる時は、中国はすぐくまぐまやっているという印象がありました。少なくとも、みんなまるまる太っていて、仕事があつて。子どもはワイワイ元気で、赤いネッカチーフなんかして。デパートでも、どこへ行っても物はたくさんはないけれど人間があふれていて、恥かしそうな娘たちの笑顔があちこちにありました。お菓子なんかも、私なんか手のひらにのるくらい小さいのを買うのに、みんなは大きいのを買って、ペチャペチャ食べている。だから北京に行った時、うまくやっているんだと、すごく感じたのです。

ところが、桂林に行った時、最初はほんとうにびっくりしました。竜門村に行った日、ショックでした。家はボロボロだし、村じゅうがフンだらけ。豚のフン、鶏のフン、牛のフン、人間のフン。トイレはないし、電気はないし、水道もない。子どもは細くやせていて、髪の毛は茶色い。栄養失調で子どもの髪の毛が茶色くなるというのは、今の中国ではほとんど見当たらないと言うけれども、その村にはあった。

子どもは、まだ一〇歳にならないような小さな子でも、両手で二人連れていて、さらに後ろに一人おんぶして子守りしてる。洋服は何回もパッチワークしているみたいな感じで、ボロボロでした。

それを見た時、私は涙ぐんでしまった。

### みかんの皮

イタリア人は、三食がちゃんとしてないとみんな投げ捨てて仕事をしないという民族なのだそうです。だからロケ隊はコックさんを連れて歩いていました。昼ごはんになると、お弁当がきます。スープとスパゲティと肉料理、食後はヨーグルトやフルーツもあります。とにかく豪華なんです。

村の子どもたちがみんな囲んで見ている中で、私たちは食事する。見られている前で食べるのはすごくいやでした。あげるわけにはいかないし、すごく心が痛んだのです。

余るほどもってくるから結局食べ残します。それをポイと捨てると、子どもたちがワー



村の子どもたちはみんな、ひとなつこくかわいい

ッと寄る。

そうすると、村についてる若い軍人が「だめ、だめ、だめ、ひろっちゃだめ」と子どもを追いはらうのです。「そんな恥をかくようなことはやらないで」と。そして「あなたたちがいる間に子どもがそういう味を覚えたら、あなたたちが帰った後、彼らは倍ぐらい悲しむ。だから、絶対食べ物は子どもたちにあげないで下さい」と言うんです。

でも、子どもたちは軍人の目をぬすんで、みかんの皮なんかサッと拾ってポケットにしまうんです。みかんは、桂林の町中に行けばたくさん売っているものです。とっても安い